

江北の四季

令和2年

11月5日

第32号



ツタ(右の写真も)



○ツタ(蔦)

写真は隣の畑の納屋に絡みついているツタ。ツタの紅葉もいいものです。名の由来は根を伝わせて成長するからツタですね。巻きひげに吸盤があり、岩や樹木にくっついて成長します。根のように見えますが、付着するだけで、そこから水や養分を吸収することはありません。



ブルーベリーの紅葉

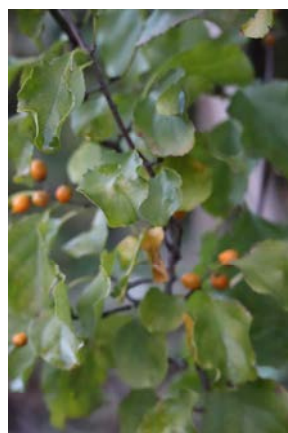


イタヤカエデの紅葉

○十一月二日から六日までは、第五十四候、霜降、末候、楓蔦黄(もみじつつたきばむ)。

もみじや蔦の葉が赤や黄色に変わり山々は錦秋に染まる頃です。

日本には落葉樹が多く、寒暖の差がある気が候が紅葉を生み出します。私たちが当たり前に思っている日本の紅葉は世界的には珍しいそうです。地軸が公転面とは傾いているので世界中どこでも四季はありますが、日本の四季ほど美しいところは無いと思います。そこに住む私たちは、桜を見ては酒を酌み交わし、月を見ては風流といい、紅葉を見てはもみじ狩りに行きます。先人は何と素晴らしい文化を育てて来てくれたのでしょうか。色鮮やかな日本の秋を心ゆくまで満喫したいものです。



ツウメモトギ(蔓梅擬)



キンポウゲ(金宝樹 ブラシの木)

○十一月七日は立冬です。冬の始まりで、縦に長い日本では雪の便りが聞かれるところもあります。実際は紅葉の見頃となります。しかしながら忙しきにかまけて油断していると、豊かな秋を味わわないうちに冬間近の寂しい秋に出会うことにもなります。

さびしきはその色としもなかりけり

槇立つ山の秋の夕暮れ

寂蓮法師

寂しさというのは色によるものではない。山には常緑樹である槇が立ち並んでいるが、秋の夕暮れはやはり寂しい。

心なき身にもあはれは知られけり

鳴立つ沢の秋の夕暮れ

西行法師

世を捨てて出家したはずの我が身にも、人生の無常が身にしみる。鳴が羽音を残して飛び立ったあとの、秋の夕暮れ時の静けさよ。

見渡せば花も紅葉もなかりけり

浦の苔屋の秋の夕暮れ

藤原定家

見渡すと、春の桜も秋の紅葉も何も無い。ただ海辺の苔茸の小屋があるだけの秋の夕暮れ、この寂しい景色よ。

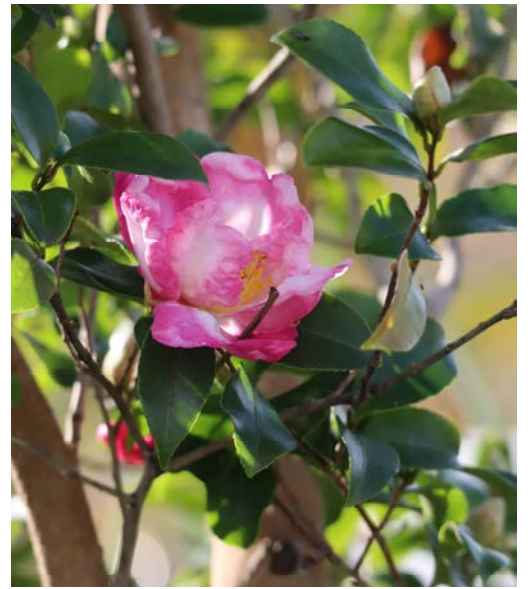
有名な「三夕の歌」といわれる新古今和歌集の中の歌です。三人ともあまりにも寂しい秋の夕暮れを歌っています。昔、国語の時に習ったときはよほどのひねくれ者かと思

っていました。しかしながら、作者は、いずれも平安末期から鎌倉初期に活躍した歌人です。貴族の時代から武家の時代に移る社会情勢の中に身を置いていた三人にとっては、世の無常をひしひしと感じていただろうと思います。私もこの歳になってくると、彼らの心情に心重ねられるようになってきました。年を重ねるということは悪いことばかりではありません。心豊かに暮らせることを感謝しなければなりません。

色鮮やかな秋の光景は次に来る寂しさの始まりでもあります。私たちがもみじ狩りに心騒ぐのも、きつと、紅葉の後に来るもの悲しい景色をわかっているからこそなのではないでしょうか。



サザンカも品種が多いです。



これもサザンカです。

○十一月七日より、第五十五候、立冬、初候、山茶始開(つばきはじめてひらく)。

「山茶」と書いてツバキと読ませています。が、「つばきはじめてひらく」の花は山茶花さざんかのことです。サザンカは十一月から十二月にかけて、そっと咲いては花びらを一枚いちまい散らしていきます。気がついたときには、木の根元は散った花びらでピンクから赤色に染まっています。ツバキが十二月から四月頃まで長期にわたって咲き、また花ごとポトリと落ちるのは非常に対照的です。私はお花を生けることもありツバキの方が好きですが、ガーデナーは寂しい晩秋から初冬の庭を元気づけてくれるサザンカの方が好きなようです。ということですが我が家の庭の周りには垣根代わりに何種類ものサザンカやツバキが植えられています。

♪

かきねの かきねの まがりかど
たきびだ たきびだ おちばたき
「あたろうか」「あたろうよ」
きたかぜびいふう ふいている

さざんか さざんか さいたまち
たきびだ たきびだ おちばたき
「あたろうか」「あたろうよ」
しもやけ おててが もうかゆい

こがらし こがらし さむいみち
たきびだ たきびだ おちばたき
「あたろうか」「あたろうよ」
そうだん しながら あるいてく

童謡・唱歌「たきび」

♪

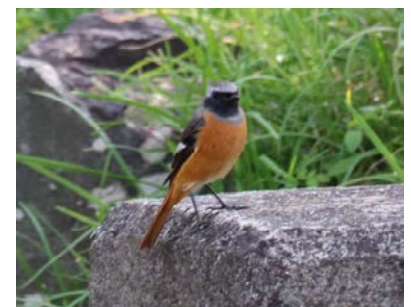
私は焚火たきびといえは焼き芋を一番に思い浮かべますが、これはきつと昭和三十年代前半生まれまでの人の話でしょうね。「しもやけ」を理解してもらえるのも同じ世代までの人かと思えます。まあ、どちらも先の東京オリピックを知っている人にしか分からないのではないのでしょうか。また、子供の頃、田んぼの秋の始末をする父親について行ったとき、稲わらや籾殻焼きの匂いや暖かさが懐かしく思い出されます。現在のように、焚火の

できない時代は寂しいですね。



柿を食うジョウビタキ

○ジョウビタキ



オスは格好いい。

一週間ほど前からジョウビタキが姿を見せるようになりました。冬を過ぎしに日本へ来る渡り鳥です。スズメよりもやや小ぶり。雄おすは、頭部は銀色、胸から腹部は鮮やかなオレンジ色、顔や背中、翼は光沢のある黒色です。雌めすは全体的に灰色がかかった褐色。一般に鳥は雄の方が美しいですね。雄、雌とも翼に白い模様を持っていますので、「紋付き鳥」とも呼ばれています。縄張りを示すために「ヒッ、ヒッ」とか「カツ、カツ」と鳴きます。名前のジョウウは「尉」で銀髪のこと。ヒタキは「火焚」で、火打石をたたく音に似た音を出すことからだそうです。時々、我が家の周辺に現れて、ぴよこんとおじぎをして尾をふるわせます。ヒヨドリが庭の様々な実を食べると腹はらが立ちますが、ジョウビタキが食べていると微笑ほほえましく感じます。何と、人間の勝手なこと！

